



**RAYT BIT ARK**

# 第 1 話

---

ープロローグー

僕の名はレイト・キアース。

さほど長くもない人生だけど、僕の過去の2年間は最悪だった。

14の時は、シングルマザーで今まで僕を育ててくれた母が突然失踪し、15になると、僕を引きとってくれた祖父も他界し、僕に身内は一人もいなくなった。

そんな僕を案じてか、祖父は亡くなる直前、これでおまえの未来を描くのだ、といって薄く青みがかった水晶のような丸い石がついたペンダントを僕に手渡し、あの世に旅立った。実にガラス工房を営む店主らしい最後だった。

だけど、ペンダントで未来など描けるものか、気休めでしかないと、しらけていた僕の前で、その石はほんのり輝き、石の中に文字を浮かびあがらせた。LINK……

これはいったい……

世の中には理解しがたい現象は数多くある。これもそのひとつなのか……

その時の心境はまさに半信半疑で、なんだか訳がわからなかったけど、16歳の冬、世間では年明けを祝う花火が上がる真夜中、カウントダウンの声と共に、僕はリンクと名付けた、その石に導かれるまま、工房の片隅に置いてあった大きな水がめの水面に飛び込み、異世界にワープした。

変わりたい。変えたい。僕は、それまでの不幸を断ち切りたかった。新しい世界に行けば、自分が変われると思ったんだ。

けど、そうしてリンクと呼応した七色のワープホールをくぐり抜け、着いた世界は、現実世界の、どこにでもあるような、ごく普通の小さな町だった。一瞬、隣町にでも来たかと思い、ハッと、思わず後ろを振り返ってみたけど、そこには、もうワープホールの姿はどこにもなかった。

「やっぱり、ただのトンネルじゃないんだ……」

もう後戻りは出来ない。ワープホールにそう言われたような気がした。どのみち意を決して、飛び込んだ世界だから悔いはない。ただ、少し拍子抜けしただけだ。

と、そんなことを思いながら、気ままに町を散策していると、この世界が確かに異世界であるという出来事に遭遇した。

町の至るところを注意深く、よく見てみると、この世界では路地裏でたむろする猫も、散歩中の

犬も、人間の言葉を話している。

しかも、地面に燦然と輝く、黄金色したライオン顔のマンホールまでもが、喋ったり空を飛んだりしていた。僕は興味津々、彼らに話しかけた。

すると、彼らは、とある人物に魔法をかけられ、今はこの姿をしているが、我々は魔界からきた魔界人だと言った。

常識では考えられないような返事まで返ってきて、僕は思わず吹き出した。けど、訳がわからないのを通り越し、つい笑ってしまったけど、そもそも異世界で、僕らの住む世界の常識なんて当てはまるはずがないんだ。

そのことに気づいた僕は、この奇妙で愛すべき者達がいる場所こそが、僕が新しい人生を始めるのに相応しい新世界なんだと思えた。僕は、ここで新生活を始めようと、彼らと話し、行動を共にすることにした。

この奇妙で愛すべき魔界人の犬の名は『ロック』、猫は『エディ』といったが、もう一人というべきか、マンホールの姿をした魔界人においては、魔法をかけられた際、その者に記憶の一部を消されてしまい、自分の名前すら思い出せないといった具合だったから、僕が彼に名前をつけた。マンホールに彫られている、ところどころ、かすんで見えかかっていた文字を拾い、ハニー・ビットマン。僕は黄金色の彼のことを、通称『ビット』と呼ぶことにした。

ところがだった。僕はこの出会いをきっかけに、その後この世界だけに留まらず、他の異世界をも、転々とすることになってしまった。僕の未来への旅立ちは、魔界を巡る冒険の始まりでもあった。

## 第2話

---

僕は彼らと共に、ここで人生を一からやり直すつもりでいたけど、ビット、ロック、エディ、彼らの思いは違っていたんだ。

さっきの話をよくよく聞いてみると、彼らは自ら望んでこの世界に来たのではなく、魔界で家臣をしていた頃、ある日城に忍び込んだ何者かによって、魔法をかけられて今の姿になり、その人物を追いかけているうちに、魔界の深い溪谷に落ちて、気づけば異世界であるこの町にいたというんだ。

彼らがひどく心配していた。自分達がいなくなった後、魔界や王が危機的な状況に陥ってやしないか、と。

そして彼らは、そうしてひと通り話し終えると、僕に体をすり寄せ迫ってきた。

「戻れるものなら今すぐにでも魔界に戻りたいんだ。我々に力を貸してくれないか」

犬と猫の訴えるようなつぶらな瞳で見つめられたら、断りづらいものがある。それで僕はつい言ってしまった。

「別にいいけど・・・それで僕は何をすればいいの？」

って。

今思えば、この一言が魔界への扉を開けた瞬間だったかもしれない。

僕が何の気なしにそう言った途端、ライオン顔のマンホール、ビットは目をピカピカ輝かせ雄叫びをあげて喜んだ。

「よし!これで魔界に戻れるかもしれん。レイトが持っている、そのペンダントがあれば。」

「は!？」

「レイトは、そのペンダントでワープし、この世界に来たのだろう。ならば、そのペンダントがあれば、我々も或いは魔界へ行けるのではないかと思ってな。」

「・・・。」

僕は返す言葉が見つからないまま、ただ、じっとビットを見つめ返した。

・・・それはそうかもしれないけど、果たして、リンクにそんなこと出来るんだろうか？

僕ですら、どうしてここへ来てしまったのか、わからないっていうのに・・・。

そんな僕の心の声をよそに、今度はロックまでつぶらな瞳を輝かせ声を弾ませた。

「それについては心配無用だ、レイト。この町の外れにある、小高い山の山頂に住むローズ伯爵夫人が、魔界に通ずる情報を持っていることは、もうすでに掴んである。ひとまず、レイトは我

々の代わりに伯爵夫人と話してくれるだけでいいんだ。」

「あ、う、うん・・・」

僕がしどろもどろになっていると、エディもエメラルドグリーンの瞳を潤ませながら、僕の膝に片手を乗せてきた。

「なら、善は急げ。さっそくローズ邸に行ってみよう!」

そうやって僕を見上げるロックとエディの口元はどこか笑っているように見えた。

いや、犬と猫は元々こんな顔か・・・。

どことなく彼らに乗せられた感は否めなかったけど、僕は乗りかかった船から降りることなく、彼らと一緒にローズ邸に向かった。

もともと、当てがあって来た世界でもなかったし、だからといって元の世界に戻れるわけでもない。

どっちつかずの現在地で、僕が選んだのは前進だった。

そんな思いを知ってか知らずか、ローズ邸に急ぐ僕の胸元では、リンクが弾むように揺れていた。

けれど、そうして息せき切らし、やっとローズ邸に着いたというのに、結果はあっけなく門前払い。ローズ伯爵夫人に目通りすら叶わず、夫人に話を聞くのはロックが言うほど容易くはなかった。それもそのはず、ローズ伯爵夫人というのは、町では変人と呼ばれるほど奇怪な人物だったから。

僕らは、さらなる魔界に通じる情報を引き出すことすら困難を極め、事は、情報を得るだけに留まらなくなっていた。この邸宅と伯爵夫人に隠された秘密まで解き明かさなければならなくなり、その秘密を探ろうとしたロックとエディが命を落とすほどの悲劇的な事件になってしまったんだ。

けれど、そうしてロックとエディの命と引きかえに、解けた難事件は意外な結末を迎えた。